

縄文土器・土偶の産科学的考察

石 原 力

医学史学において先史時代の占めるウエイトは、これまで必ずしも大きくはなかったが、しかしそれは興味ある主題である。

本邦の縄文土器・土偶にみられる妊娠、分娩（誕生）、哺乳といったモチーフについては、一般に考古学者等による解釈や見解が流布している。それはそれで貴重であるが、なかには少々の外れなものもあるように思われる。これは人間における分娩の実際をみたことのない人によってなされた解釈のためではなからうか。ここに門外漢である産婦人科医の発言しうる余地があると考ええる。

さて、縄文土器や土偶については、美術書や図録によって紹介され、かなり知られているけれども、それらの実物は、各地の辺びな考古資料館などに保管されていて、なかなかみる機会がえられない。一九八三年秋に山梨県立考古

博物館で開かれた「土偶」特別展は、主に山梨・長野県出土のものを一堂に蒐めたもので、杉立義一氏に教えられ、みることができ、大いに参考になった。

日本最古の女人像は、愛媛県上浮穴郡美川村上黒岩岩陰遺跡から発見された五・六cmの小石四個にえがかれたもの（礫偶）で、通称「黒岩のビーナス」と呼ばれている。

縄文時代草創期の作といわれ、二個には豊かな乳房と、乳房にかかった長い髪と、局所を掩いかくす腰褌が、他の二個には長くたれ下がった髪と、その一個には腰衣様のものが、細い線で刻まれており、顔や手足はない。水野正好氏は、髪、乳房、腰褌は、女性を表現する最少の要素としている。スマールの象形文字では、乳房と胃の画を結びつけて妊娠を表わしたというが、「黒岩のビーナス」の乳房と腰褌とのペアには、腰褌に呪的、腹帯的意味を認めるとき、妊娠の表現がこめられているように思われる。

縄文中期になると、妊娠状態を示す土偶が現われてくる。

中期前葉では、早期・前期以来つくられてきた板状土偶の胸部に、乳房を表わす粘土粒が二個つけられ、その下に

妊娠腹部膨隆を示す一個がつけられる。青森県西津軽郡森田村石神遺跡出土のものがそれである（森田村教育委員会所蔵）。

中期中葉の妊娠土偶では、新潟県糸魚川市長者ヶ原遺跡から出た高さ三〇・〇cmの頭部破壊のもの（東京国立博物館所蔵）が、粘土粒の貼り付けの代わりに、前胸部から臍部に及ぶ正中の沈線をかき、最下端を僅かに丸くして妊娠を表わしている。また新潟県栃尾市栃倉遺跡から出た高さ一・五cmの頭・手・足を欠くもの（栃尾市教育委員会所蔵）も、正中の沈線と腹部膨隆を示す下腹部の横楕円形の線がえがかれている。沈線は正中線の妊娠による色素沈着（黒線 *Linea nigra*）を示していると考えられるが、妊婦では通常臍から下の方が強い。

中期後葉になると、長野県茅野市尖石遺跡から出た高さ八・五cmの妊娠土偶が、その造形の美しさから有名である（東洋観光事業団所蔵）。妊娠表現の沈線が上腹部にあり、右手を右の腰の上に軽く当て、左手は胸に当てているが、これは縄文中期の定型的ポーズである。足はくずして横に坐っている。腹部膨隆の形状から、これは妊娠末期の初妊婦

と考えられる。

晩期では、青森県西津軽郡木造町亀ヶ丘遺跡から出た高さ一九・五cmのリアルな妊娠土偶が有名である（東京大学人類学教室所蔵）。特徴的なことは、懸垂乳房がみられることで、モデルが経産婦であったことが知られる。腹壁も経産婦にみられるように、少し弛緩して前下方に突出しているようにみえる。

山梨県韮崎市藤井町坂井遺跡出土の中期の誕生土偶（坂井考古館所蔵）は、五・六cmであるが、股間にみえるものは半分娩出した全膝位の児のようである。また山梨県北巨摩郡須玉町御所前遺跡出土の深鉢形土器は五八・〇cmの大きさであるが、顔面把手が産婦を表わし、これの下側とその対側の外面に頭位で娩出する児の顔がみえる。メキシコの Tlazoltecoitl 神の出産石像を想起させる作品である。

長野県諏訪郡富士見町唐渡宮遺跡から出土した六四・五cmの中期の深鉢形土器（井戸尻考古館所蔵）には、黒くえがいた出産図がある。両手を大きく横に開いて腰をかがめた姿勢をとり、中央の外陰部から下へ二本の線をえがいている。胎盤、臍帯説もあるが、私の見たところでは臍帯と思

われる。その構図はフランスの Dordogne の Laussel に
のこる氷河期後期の出産図と同じ正面図である。図の視
点が産婦と対座する助産者の位置にあることは、これを
えがいた者が助産も行っていた女性であることを暗示す
る。すなわち縄文時代には女性による助産行為があつたと考
えられる。

(虎の門病院産婦人科)

江戸期の子育ての書に現われた 乳幼児発達観

小嶋 秀夫

江戸時代を中心としたわが国の子育ての書の中で、乳幼
児の発達についてどのように考えられていたかを構成して
みることに、この小論の目的である。それがどのような意
味をもちうるのか。主なものはつぎのようである。

(一) たんに乳幼児を取扱う技術・方法を問題にするので
はなく、その背後にある信念・価値のシステムをも問う
ことにより、特定の方法がどのような意味で用いられたか
を明らかにできるであろう。

(二) 乳幼児の行動的・心理的発達の過程についての当時
の理解の中に、今日から見ても重要な認識や洞察が認めら
れる。乳幼児をどのような存在だととらえ、どのように取
扱ってきたかを知ることが、わが国の育児文化の伝統を考
えるうえで、重要な意味をもつであろう。現在の中に、過